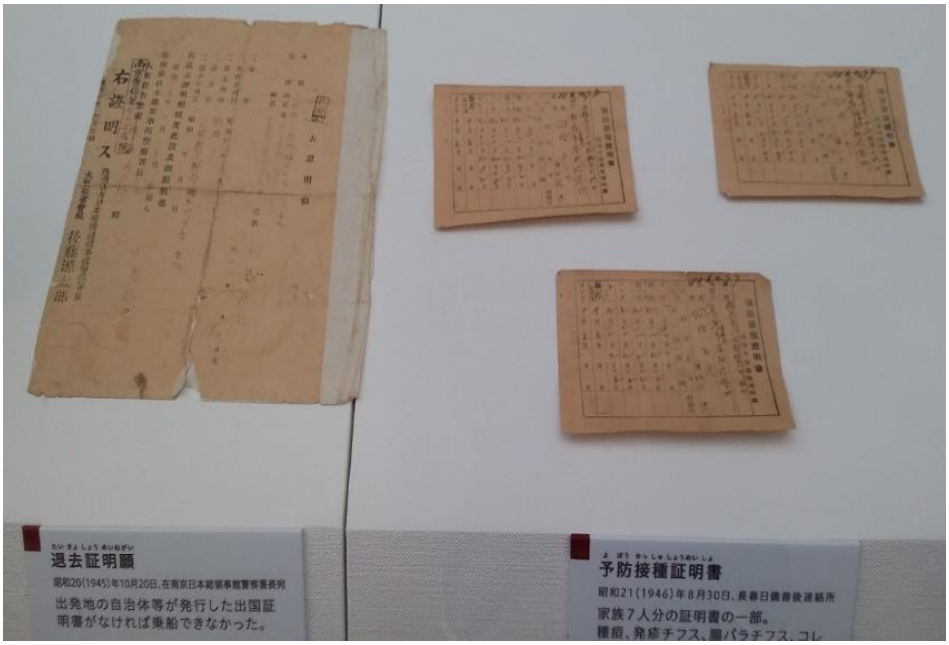
引揚港・博多

11 月 2～4 日の連休、福岡へ旅行に行って来た。以前から福岡へ行ったときには寄ってみたいところがあったので、いっしょに旅行した年の離れた友人（大学生の男女 2 人とその父親 1 人）も誘って引揚に関する資料などを常設展示している福岡市市民福祉プラザへ向かった。施設の一角での常設展示なので規模は大きくはないが、引揚について今の時代にも伝えていこうとする福岡市には感謝の気持ちを伝えたい。
ホームページ⇒http://hakatakou-hikiage.city.fukuoka.lg.jp/summary/

わたしたちが福祉プラザに行った日は子どもたちの音楽発表会のような催しがあって、ホール前やロビー付近にはきれいに着飾った子どもとその保護者が多くいた。しかし常設展示されている場所には誰もおらず、そこへ彼らを案内するには少し寂しい空気があった。だが、そのとき友人の父親が「わたしの母も朝鮮から引揚げてきたんですよ」といった。その一言を聞いて、引揚常設展へ行こうと提案した気持ちが救われた。友人の父親の母、つまり女子大生のお祖母様は清津の学校に通っていたが、父親が転勤で内地に行ったあとも学校があるということで一人残っていたとのこと。引揚時には両親はいなかったが、他の日本人の協力もあって無事に引揚げてきたようだ。友人とその父親が常設展示されている資料を丁寧に見ている姿を見てわたしもうれしくなった。



釜山からの引揚船は博多か仙崎に着いた。仁川からの引揚者の中には仙崎へ着いたという方もいた。祖父一家は博多だったと母が記憶している。『仁川引揚誌』によると引揚が始まったのは昭和 20 年 10 月 27 日、軍人とその家族が先に引揚げたとある。祖父の記録を見ると祖父一家は 11 月 1 日には内地に引揚げて、11 月 4 日徳島県池田町で住民登録をしている。福祉プラザにある引揚に関する資料館には引揚名簿というものも残されているのだが、公開できないことになっているそうだ。仁川から引揚船に乗る釜山までは貨車に乗って行った。当時は線路が混雑したこともあり、数日かかったという。そして釜山で乗船するのにも時間がかかり宿泊をした人たちも少なくないとのこと。そういったことから考えると祖父一家は 28 日に仁川を出発したのかもしれない。一家は祖父を筆頭に祖父の母、3 人の娘（小学校 3 年生、小学校 1 年生、4 歳）である。祖父の妻と長男は仁川で亡くなったので骨箱を曾祖母が持って引揚げた。

母の記憶では釜山に向かう貨車が何度も停車し、その度にお金や貴重品が集められた。そして停車している間に食事をしたり、用を足したりしたとのことだ。釜山から博多までの船で母は相当船酔いをしたらしく、徳島に行くにはもう一度船に乗らないといけないことを聞いてショックを受けたそうだ。また博多について DDT という白い粉をかけられたことも覚えていた。母は生後 5 ケ月で父親が待つ朝鮮に渡ったため、日本内地での記憶はない。引揚で初めて目にした日本内地は母の目にどう映ったのだろうか。

『仁川引揚誌』の後半にある「元仁川在住者名簿」には祖父の名前も載っている。だが、活字にする際に間違ったのだろう、漢字が違っていた。名簿には森本憲とあるが、正しくは森本寛である。小さい娘 3 人と自身の母親を連れての引揚は祖父にとっては大変だったろうと想像がつく。仁川での生活の様子や終戦から引揚と、今なら祖父に聞きたいことが沢山ある。わたしが初めて仁川を訪れたのは祖父が亡くなってから 3 年後、仁川によく行っていた大叔父が亡くなった翌年だった。

（祖父と従妹といっしょに、昭和 50 年頃）